

典礼奉仕としての聖書朗読

1 はじめに

ミサの「ことばの典礼」における聖書朗読は、毎回必ず行われるわけですが、

- 読み間違いが多い。
- 不明瞭^{めいりょう}で何を言っているか分からない。
- 早口で聞き取れない。
- 妙に感情が込もって芝居^{しばい}がかっている。

..... といった朗読に首をかしげたことはありませんか？残念ながら布池教会においても、時々このような朗読を耳にすることがあります。そこで、私も含めた朗読奉仕者の意思統一の為にこのような文書を作成しました。お暇なときでかまいませんので、目を通していただくと幸いです。

なお、ご注意いただきたいのですが、この文書はカトリックの典礼における聖書朗読の霊^{れいてき}的な意義^{いぎ}等に関して解説..... というようなものではありません¹⁾。あくまで一信徒が典礼奉仕に

1) そのような解説に関してはこちらを御参照下さい。『朗読聖書の緒言』:日本カトリック典礼委員会 編, カトリック中央協議会 (1998) ISBN978-4-87750-088-7.

おける聖書朗読に関して注意点と理由を述べたものです。

2 聖書朗読のポイント

聖書朗読で知っておきたいポイントをまとめておきます。

1. 聖書朗読は、ことばを直接会衆に伝える重要な典礼奉仕である。
2. その重要性は、文字を読めない人が大半だった原始の教会ではもちろん、現在の教会においても変わらない。
3. 朗読は、自分の口から言葉を発していても、それは自分の言葉ではなく、神のことばであり、キリストのことばである。

まずはこれを念頭ねんとうに置きましょう。そうすれば、自ずと注意すべきこと、しなければならないことは見えてくると思うのです。

2.1 ことばを直接会衆に伝える典礼奉仕

キリスト教の成立当初、共同体を構成していた人達の大部分は文字の読み書きのできない人達でした。しかし、キリスト教は文字で記された聖書をより所とし、権威あるものとしてきました。旧約聖書は言うに及ばず、新約聖書を構成することになる各文書、そして現在の聖書に収録しゅうろくされていない様々な文書..... そういったものが、文字で記され、流布るふされ、共同体で共有されていたわけです。

「大多数が文字の読み書きができない人達」が「文字で記された信仰のより所を流布し、共有していた」..... では、文字の

読めない人達はどうやって文字で書かれたものを享受きょうじゆしていたのでしょうか。

実はこれこそが聖書朗読のルーツです。当時の共同体にごくわずかに存在していた文字を読める人達は、大多数の文字の読めない人々のために朗読奉仕を行い、会衆はそれを聞くことで聖書や書簡しょかんの内容を共有していたのです。つまり、典礼における聖書朗読は、二千年の昔から私達が信仰と共に受け継ついだ、共同体が信仰をつなぎ、わかちあう為ための重要な行為なのです。

2.2 聖書朗読は神のことば、キリストのことば

では（皆文字を読める）現在のミサで聖書朗読を行う意義は何なのでしょう。これは明文化されていて、たとえば『ローマ・ミサ典礼書の総則』第2章9には以下のような記述きじゆつがあります。

聖書が教会で朗読されるときには、神ご自身がその民に語られ、キリストは、ご自身のことばのうちに現存げんそんして福音を告げられる。

つまり、聖書朗読がただテキストを読む行為でなく、そのことばを通して神のことば、キリストのことばを会衆にもたらす重要なプロセスであることを示しています。

教皇フランシスコは、2018年1月31日の一般謁見えっけんにおける「神とその民の対話である、ことばの典礼」をテーマに行われた講話こうわの中でこの記述を引用いんようされています。その際に、

聖書が朗読される時、聖書のページは書かれたものから、神によって話される生きた言葉となり、神はわたしたちに

それを聞くようにと呼びかけられる²⁾
と言^{げんきめう}及されています。このことから分かるように、この 21
世紀においてもなお、聖書朗読はきわめて重要な典礼奉仕なの
です。

3 ^{じっせん}実践編:注意すべきこと

3.1 奉仕であることを意識する

典礼奉仕^{たづさ}に携わるということは、会衆の中で人前に入る、人
目に触れることとなります。そこに何らかの優越感や特権意識
を感じる人というのが、残念ながら存在するようです。また、
長く奉仕に携わっておられる方でも「してやっている」という
意識を持ってしまうことがままあるようです。

しかし、奉仕というのはそういうものではありません。たまた
まこれを書いている今日、教皇フランシスコが Twitter でこ
んなことをつぶやかれました:

洗礼者聖ヨハネのように、キリスト者は謙遜^{けんそん}にならねばな
りません。そうすれば自らの心^{みづか}のうちに主が育つのです³⁾
つまりはそういうことですよ。この謙遜は、ただ目前^{もくぜん}の会衆
に向けたものではありません。何よりもまず主に向いたもので
あり、そして自分に向いたものでもあるはずなのです。奉仕は
無償^{むしょう}の行為であっても、この意味^{いくぼく}において幾許かの責任が生じ
るものです。まずはその責任を自分の負える範囲で負い、果た
すことを意識しましょう。

2) 『典礼の中で神ご自身が語る言葉に耳を傾ける、教皇一般謁見』:バチ
カン放送局 (31/01/2018) より引用

3) https://twitter.com/chuokyo_pope/status/1011034462811901952

3.2 練習しましょう

読むにあたっては..... まず、練習しましょう。少なくとも一、二度は、実際に声を出して読むべきです。会衆席で声を出さずに口だけ動かして練習するのも良いでしょう。本番で引かかる箇所は、練習すれば必ず引がかかります。そうなれば、対策（そこを何度も読み返したりルビをふったり）を講じられるのです。事前の時間がない場合も、何度か黙読して構成と内容を把握しておきましょう。

3.3 音読のポイント

3.3.1 発声・発音

朗読ですから、声が出なければ読めません。事前の音読は発声練習の効能もあります。また朗読台の前に立つと緊張するのです。身体に無駄な力が入らないようリラックスして、姿勢を整え、一呼吸してから読み始めましょう。

発音にも気をつけましょう。文末と子音はとかく不明瞭になりやすいので、あわてず確実に読みましょう。発音の似通った言葉（たとえば「神」と「民」のような）も混同しないよう注意しましょう。

3.3.2 読む速さ

人は、ある程度慣れた内容を音読する際に早口になる傾向があります。分かっているのでさっさと話そうとしてしまうわけですが、聖書朗読はあくまで会衆にみことばを伝えることが目的ですから、会衆のペースに合わせて読む必要があるわけ

です。

「『聖書と典礼』を見ながら聞いているんだから……」

いいえ、それは断じて違います。聖書朗読の内容はことばでもたらされるのです。ですから『聖書と典礼』を見ていない人がことばで内容が受け取れるように読まなければなりません⁴⁾。

「ちょっと遅いかな」位で丁度良いので、言葉の端々^{はしはし}までおろそかにせず、会衆に送り届ける気持ちで、自分の口から出た言葉のひとつひとつが、会衆の耳に入っていく様子を思いつつ読みましょう。

3.3.3 聞きながら読む

そして大事なのは、聖堂に反響^{はんきょう}して返ってくる自分の発した声、自分の発したことばに耳を向けながら読むことです。聖堂に響くあなたのことばは、もはやあなたのことばではありません。神のことば、キリストのことばです。会衆の一人として、あなた自身もそれを受け止めつつ読みましょう。そうすれば、ぞんざいに速く読むことは自^{おの}ずと出来なくなるはずなのです。

3.4 自分の言葉ではない

何度も書いているように、「ことばの典礼」における朗読は朗読者のことばではありません。聖書に記されている神のことば、キリストのことばそのものです。ですから、

- 書いてあるままに読む。
- 書いていないことは読まない。

4) そして会衆も『聖書と典礼』を見ずに朗読を聞くべきなのです。

- 朗読者の私情^{しじょう}を込めない。

ことが求められます。

3.4.1 書いてあるままに読む

これは「正確に読む」ということですね。私達は人間ですから、全くミス^{ミス}をせずに読める保証はありませんが、ミスのないように努める^{つと}べきではあるでしょう。事前の練習、チェックを行いましょ。

3.4.2 書いていないことは読まない

これは以前に実際にあった話です。ある信徒が朗読をすることになったのですが、このときの朗読箇所には「イエスは」という文言^{もんごん ふくすう}が複数回出ていました。そして「ことばの典礼」が始まると、この方は、「イエスは」という文言を全て「イエスさまは」^{おおか}に置き換えて朗読を行ったのです。

この方はおそらく、自分の口から「イエスは」「イエスは」と出てくるのを不遜^{ふそん}だと感じたのでしょう。しかしこの方は、自分の口から出てくるものが自分のことばではない、ということをご存知^{ぞんじ}なかったために、逆に、神のことば、キリストのことばを、自分のことばにしてしまったのです。

改竄^{かいざん}というには大袈裟^{おおげさ}ですが、これは朗読者としてはすべきでないことです。私達は、典礼における聖書朗読の意味をしっかりと頭に入れておく必要があるのです。

3.4.3 朗読者の感情を込めない

「分かっていない」朗読者は、自らが記者^{きしゃ}や登場人物になり代わり、感情を声に込め、権威^{けんい}を演じ、勧告^{かんこく}を与えるように読

んでしまいがちです。しかしそれは、聖書のことばを朗読者のことばにすりかえているだけです。聖書に込められた言霊^{ことだま}が人々の心に入っていく邪魔^{じゃま}をしてしまうことになります。

ではどうすればよいのでしょうか。まずは冷静に読むべきです。変な描写^{びようしゃ}、過度な感情、ましてや私情を込めることは避けるべきです。ただし、冷静に読むということは機械的に読むことと同一ではありません。言葉や内容の喚起^{かんき}するイメージを損^{そこな}わずに伝えることを意識して読みましょう。

このように読むためには、まずスムーズに読めることが前提^{ぜん}になりますから、先に書いた「練習」はここでも効いてきます。何度か練習し、引っかかるころがあれば対策^{ほどこ}を施すことが、無用な感情^{はいじょ}を排除し、聖書^{ゆが}を歪めずに会衆に伝える上でも重要なのです。

昔よく聞かされた言葉で、今では耳にする機会も少なくなりましたが、教会では「神様の楽器になりなさい」と言われることがありました。「ことばの典礼」で大事なことは、この言葉に端的^{たんでき}に表されていると思います。私達も、神様の楽器になろうではありませんか。